



Title	学校保健と連携した中学校への思春期教育：健やか 思春期応援隊が行う「生と性」の健康教育
Author(s)	大阪府寝屋川保健所
Citation	大阪公衆衛生. 2008, 79, p. 23-25
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/83440
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

研究報告

学校保健と連携した中学校への思春期教育

～健やか思春期応援隊が行う「生と性」の健康教育～

事業実施主体：大阪府寝屋川保健所

寝屋川市の概要

大阪府の東北部、淀川左岸に位置し、大阪市域の中心から15kmの距離にある。総人口241,825人、世帯数95,885世帯（一世帯平均2.5人）、人口密度9,779人/km²（平成17年10月1日大阪府統計年鑑）1保健所、1保健センターが管轄している。

1. はじめに

平成16年9月に保健所が医療・保健・教育・地域の関係者に声をかけ、HIV/エイズ予防対策ワーキングを立ち上げた。ワーキングでは「命の大切さと性」の面から寝屋川市域の子どもたちの健康づくりを話し合っている。その中で、中学校での性・エイズ教育は、保健体育科の単元にあるが内容や指導方法は明記されず、知識を伝える学習では性の問題が深められないまま卒業していくという現状に担当教師も困惑していることが報告された。そこで、常に命の問題と接している保健・医療・地域の関係者が、中学生を対象に「性＝生きること・命の大切さ」を、体験学習で伝える体制を整えた。今年度、「健やか思春期応援隊」と称して、モデル中学校2校と連携して健康教育を行った。

2. 目的

管内の関係機関で結成した「健やか思春期応援隊」が学校保健と連携して思春期の子どもたちの健康づくりを推進していく。

3. 方法

1) 取組の経過

ワーキングメンバーが所属する寝屋川市内の公立中学校2校を平成18年度のモデル校とした。モデル中学校（A校・B校）と応援する関係者で実施の打ち合わせを重ね、対象、内容等を検討しながら進めた。学校行事等の関係

で、実施は12月～1月に集中した。1・2年生では体験学習を取り入れ、3年生では現在の中学生在が「性について」どう考えているか見える形にしたいと生徒参加型の学習を実施した。当日の健康教育の講師については、市助産師会及び保健所の保健師が担当した。また、生徒に事前・事後アンケートを実施して効果判定するとともに、担当教師にも事後アンケートや聞き取りを実施した。

2) 取組の内容

①「命の出前講座」

ねらい：命の誕生に関わる助産師から、ひとつの命の誕生の大変さや、どんな思いにつつまれて誕生してくるのかを伝え、命の尊さについて考えさせる。

対象学年：1年生・・・B中学校144名（4クラス全員）

講師：寝屋川市助産師会 助産師2名

②乳幼児親子ふれあい体験

ねらい：中学生と乳幼児親子が交流する機会を作り、ふれあい体験を通して「生命の輝き」を感じるとともに、生命の尊厳や性について考えさせる。

対象学年：2年生・・・A中学校2年生（保健委員12名 男子：6名・女子：6名）

講師：寝屋川市助産師会 助産師1名

③ HIV/エイズ予防教育

ねらい：命の大切さを伝えることを基本に、性感染症やエイズの問題を自らの問題と捉え、望まない妊娠やエイズを含む性感染症から自分や相手の『心と体』を守る力をつける。エイズへの偏見や差別をなくしていく。

対象学年：3年生（2クラスを男女別々のクラスに分けて実施）

A中学校 70 名(女子 30 名・男子 40 名)、B 中学校 78 名(女子 38 名・男子 40 名)

講師：寝屋川保健所地域保健課感染症チーム 保健師 2 名

4. 結果

1) 「命の出前講座」

中学1年生 144 名を対象にしたこの講座は、体育館という広い空間での授業にも関わらず、熱心に聞く生徒の姿が見られ、特に赤ちゃんの誕生シーンや入浴シーンは集中して聞いていた。

赤ちゃん人形抱っこ体験は実際に赤ちゃんを抱っこした体験をもつ生徒も多く男女とも抵抗なく体験できた。妊婦服着用体験は、比較的興味を持って参加していたが、恥ずかしさが先に立ち妊婦服の着用を嫌がる生徒もいた。体験の主旨が伝わりにくく、妊婦服や赤ちゃん人形を乱雑に扱ったりする生徒もいた。

生徒アンケートでは、「わかりやすく説明してもらいよく分った」、「命はとても大切なもの、お母さんが頑張って産んでくれてうれしい」、「両方の体験ができてよかった」という素直な感想が多く出ていた。

学校側からは、今後機会があればどんどん導入していきたいという前向きな意見があった。

2) 「乳幼児親子ふれあい体験」

中学2年生の保健委員を対象にしたこの講座は、少人数での取組みになったが、実際の赤ちゃんふれあい体験でもあり雰囲気も和やかで、生徒も終始生きいきと参加していた。乳幼児のお母さん方から妊娠、出産にまつわるエピソードや子どもへの思い、毎日の育児の奮闘話を聞き、生徒は命の誕生や子どもを産み育てていくことの喜びと大変さを感じていた。赤ちゃんを抱くことを楽しみにしていた生徒も多く、抱っこしたぬくもりや心地よさに感銘していた。

参加した生徒たちは、ふれあい体験から得たことを学校で事後学習し、その時の思いを記事にして写真と一緒に学校に掲示し、学年全体に伝えた。参加したお母さんたちは、中学生に対して悪いイメージをもっていたが、今回の交流を通じて「とても温かい気持ちになった、子を持つ親として、社会人として、子どもたちに何がで

きるかと思案している」という言葉が寄せられた。

短時間の交流ではあったが生徒のみならず乳幼児のお母さんにも大きな感動があった。

3) 「HIV/ エイズ予防教育」

中学3年生の保健体育の時間を使い、男女別々のクラスにして同時並行で実施した。生徒の聞く態度は全体にざわついていたが、男子に比べ女子は真剣に聞いていた。今回はクラス単位の授業だったので、講義に加え生徒参加型の学習を試みた。生徒に「こんなときあなたならどうする」と事例を提示し、次に事例に関する各自の思いを自由記載させ、黒板に張り出した。

性についてなかなか発言しない生徒もこの展開には軽い乗りで参加していた。戸惑って書けない子やふざけて書いている生徒もいたが、記載内容を見ると、講師側も生徒自身も中学3年生が性についてどのように考えているのかよくわかりとても有効であった。そのあと、意見を書いた用紙を男子は女子、女子は男子で交換したこともインパクトがあり効果的だった。

記載内容をみると、男女の差というより同じ中学3年生でも一人ひとりの成熟の度合いや性行動に対する認識の違いの差が如実に現れ、生徒の個人差は大きく、大人が考えている以上に性を意識しすぎている生徒もいた。

今回の授業を通じ生徒自身の問題として考えるなど、性感染症予防の正しい知識を持たせる大切な機会となった。

5. 考察

今回2つの中学校をモデル校とし、「命を大切にする」という視点から学校保健と連携した思春期教育を「健やか思春期応援隊」として実践したが、中学生の実態と置かれている現状を垣間見ることができた。

スムーズに実施できた要因は、事前に学校側と実施するスタッフ側が打合せを重ね全体のシミュレーションできていたこと、学校として学年全員の先生方の協力が得られたことにつきる。また、「命の出前講座」や「乳幼児親子ふれあい体験」を担当した講師は、命の誕生に関わってきた地域の助産師であり、命の輝きを伝える力も大きく、生徒が地域の助産師という仕事に対していいイメージをもったことも成果である。

以下今後に向けて整理した課題を述べる。

- ① 2年生の「乳幼児親子ふれあい体験」は、少人数でないと実施できず、2年生全体に広げるには無理がある。地域でどのような形で取り組めるか検討を要する。また、「命を大切にする」という視点で、2年生に薬物乱用やたばこ・アルコールなどを実施してはという意見があった。
- ② 3年生の HIV/ エイズ 予防教育を、今後中学校が主体的に取り組むためには、学校保健担当者や養護教諭が実施できるような健康教育の媒体や資料の提供が必要と考える。また、性感染症の正しい知識や情報の提供とともに生徒が自分の問題として考える力をつけることが大切だが、50 分の授業では内容が多すぎ、2コマの授業時間が必要となってくる。実施にあたっては各学校の状況により内容のアレンジが必要と考える。

6. 結論

「健やか思春期応援隊」のメンバーが中学校と連携して実施した今回の取り組みを、平成19年3月に HIV/ エイズ 予防対策ワーキングで報

告した。

各委員から、「今回の実践を通してあらためて中学生の生と性の現状を知るとともに、性＝命の大切さについて体験を通して伝えていくことの必要性」が多くでていた。また、「モデル中学校の1年生が3年生になった時、どのような成果がみられるか見ていきたい」という継続の必要性も出された。

思春期の多感なこの時期に外部講師から「命の大切さ」を聞く機会を持つことは大きな意味がある。中学生への健康教育は今回の取り組みで一步踏み出した段階であり、継続するには学校保健分野の主体性や学年の先生方の協力が必要である。今後は、学校との役割を明確にしながらより効果的に継続できるよう進めていきたい。

研究報告

南港ポートタウンでの蚊発生状況 調査及び改善指導結果について

大阪市住之江区保健福祉センター

松岡 鉄男 服部 まひろ 阿部 勤 植野 隆光 山崎 巧

近藤 孝幸 今川 精二 牛尾 雅宣

1. はじめに

大阪市では、以前から蚊の苦情・相談は多く他の衛生害虫に比べそれほど減っていないと考えられる。また、1999 年米国に侵入したウエストナイル感染症は急速に全米に広がったが、原因であるウエストナイルウイルスは自然宿主である野鳥から蚊を媒介として人に感染するため、わが国への侵入も危惧されている。侵入時に

備え、蚊を減らしておくことが有効であると考えられている。

従来本市では、蚊の苦情対応は指導薬剤の提供や機材貸出が主であったが、より効果的に蚊を削減する為には蚊の発生源を把握し、発生源管理者への対策指導が不可欠と考えた。

そこで、平成 17 年及び平成 18 年に、住之江区内でも蚊の相談が多く野鳥公園に近い南港